

平成22年9月30日

「第7回文化庁映画週間 -Here & There」の開催

文化庁では、魅力ある総合芸術であり、かつ海外への日本文化発信の有効な媒体である日本映画の振興に様々な観点から取り組んでいます。その一環として、今回7回目となる「文化庁映画週間」を東京国際映画祭期間中に開催し、優れた文化記録映画や永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰するとともに、シンポジウムやトークイベントなどを実施し、あらゆる立場の人々が映画を通じて集う場を提供します。（東京国際映画祭事務局同時発表）

1. 会期 平成22年10月23日（土）～10月30日（土）
2. 場所 六本木ヒルズ、シネマート六本木（港区）
3. 主催 文化庁／公益財団法人ユニジャパン
4. 協力 一般社団法人コミュニティシネマセンター
特定非営利活動法人ジャパン・フィルムコミッション
5. 実施事業の概要
裏面参照

文化庁文化部芸術文化課
課長 山崎 秀保（内2822）
調査官 佐伯 知紀（内2829）
担当係長 藤澤 和寛（内2083）
【代表】03-5253-4111
【直通】03-6734-2083
文化庁映画週間URL（※外部サイト掲載終了）

実施事業の概要

平成22年度文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

・・・P3

(主催/文化庁)

【贈呈式】

日程：10月23日(土) 18:30～

会場：六本木ヒルズ「グランド ハイアット 東京」

優れた文化記録映画作品を顕彰する文化記録映画部門および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰する映画功労部門の贈呈式を実施します。

【受賞記念上映会】

日程：10月24日(日) 11:00～

会場：シネマート六本木「スクリーン1」

文化記録映画部門受賞3作品の受賞記念上映会を実施します。

映画人の視点 Filmmaker's Angle

(主催：文化庁、ユニジャパン)

日程：10月23日(土)、29日(金)、30日(土) 22:00～

会場：TOHO シネマズ六本木ヒルズ「スクリーン7」(23日)

「スクリーン2」(29日、30日)

日本を代表する俳優や監督にスポットを当て、多彩なゲストを迎えて、映画について語っていただくとともに、俳優・監督自身が推薦する作品のオールナイト上映を行います。

シンポジウム—MOVIE CAMPUS—

(主催：文化庁/共催：ユニジャパン/協力：ジャパン・フィルムコミッション、コミュニティシネマセンター)

日程：10月27日(水) 13:00～

会場：アカデミーヒルズ49「オーディトリウム」

「MOVIE CAMPUS」は国内外の映画製作活動や上映活動において、新しい取り組み事例や旬な映画文化ムーブメントをアカデミックな視点で紹介するシンポジウムです。「地域」や「映画文化」における課題や展望に興味関心を持った人々が集い、映画プロフェッショナルや地域のロケ支援・上映支援サポーターたちと“映画づくり”や“まちづくり”の学びの拠点として情報を発信していきます。

映画ナビゲーターズ

(主催：文化庁／共催：ユニジャパン)

日程：10月29日(金)、30日(土) 18:30～

会場：TIFF movie café

「文化庁映画週間」の新プログラムとして、映画ファンのための新しい映画カルチャートークイベントを開催します。映画を敬愛する文化人をゲストに招き、独自の視点や語りを通じて、映画作品が持っている奥深さや世代を超えた楽しみ方の秘訣をナビゲートしてもらいます。

(参考) 第23回東京国際映画祭開催概要

期間：平成22年10月23日(土)～10月31日(日) 9日間

会場：六本木ヒルズ、シネマート六本木等

企画内容に関する詳細お問い合わせ先

公益財団法人ユニジャパン TEL 03-3524-1081 FAX 03-3524-1087

※文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会の詳細

平成22年度文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

文化庁では、我が国の映画の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々（映画功労部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門では、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の製作団体に対して、文化庁映画賞として賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労部門についても次のとおり7名の方を受賞者として決定し、それぞれ文化庁長官から文化庁映画賞が贈られます。

【贈呈式】

日 時 平成22年10月23日（土）18：30～
会 場 六本木ヒルズ「グランド ハイアット 東京」2F コリアンダー

【受賞記念上映会】

日 時 平成22年10月24日（日）
11：00～『月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～』
14：30～『こつなぎ 山を巡る百年物語』
18：15～『ただいま それぞれの居場所』
会 場 シネマート六本木「スクリーン1」

【平成22年度文化庁映画賞受賞一覧】

＜文化記録映画部門＞

文化記録映画大賞	作品名	ただいま それぞれの居場所
	製作団体名	大宮映像製作所
文化記録映画優秀賞	作品名	こつなぎ 山を巡る百年物語
	製作団体名	株式会社周
	作品名	月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～
	製作団体名	株式会社グループ現代

(作品名50音順)

【文化記録映画部門贈賞理由】

『ただいま それぞれの居場所』監督：大宮 浩一 2010年／96分

2000年に、介護保険制度がはじまって以来、介護サービスが盛んに行われるようになったが、その一方で、介護を必要としながらも、制度の規範にあわず、受け入れられないといった人々も少なくない。この作品では、そうした現状をふまえ、自分の理想とする介護を展開しようと開設された、施設の事業所や施設を訪ね、その介護の現場で働く人々に密着して、多種多様な介護の実態を、生々しく、印象深く描き出すことに成功している。＜福井 康雄＞

『こつなぎ 山を巡る百年物語』監督：中村 一夫 1960～2009年／120分

岩手県北部の小繋という小さな集落の「入会権」を巡る長期の裁判と農民たちの暮らし。山で生きる権利を求めて村を二分して繰り返された複雑な葛藤の歴史が丁寧に紡がれ、その時々の人々それぞれの思いが語られる。1960～70年代に三人のジャーナリストが記録した未公開資料の説得力が、映像アーカイブの重要性を示唆している。時がたち、「限界集落」化や「里山」荒廃が語られる日本の地域社会—その縮図がここにある。＜中嶋 清美＞

『月あかりの下で ～ある定時制高校の記憶～』監督：太田 直子 2010年／115分

生徒の九割以上が不登校や中退の経験を持つという夜間定時制高校で、学生生活の「リベンジ」を目指す若者たちの、入学から卒業までの四年間の記録。目に見えない鎧を脱いで、次第にクラスメートと打ち解けていく女生徒の『学校だけど学校じゃないみたい』という言葉が、本当に必要な「学びの場」とはどんな場所か、「人が成長する時間」とはいつなのか、考えるきっかけを与えてくれる。親子で一緒に見ることをおすすめしたい作品。＜清水 浩之＞

※＜ ＞内は執筆した選考委員名

<映画功労部門>

氏 名	年齢	分 野
井上 治（いのうえ おさむ）	78	映画編集
笹川 ひろし（ささがわ ひろし）	74	アニメーション監督
杉井 ギサブロー（すぎい ぎさぶろう）	70	アニメーション監督
築地 米三郎（つきじ よねざぶろう）	87	映画撮影
橋本 泰夫（はしもと やすお）	66	映画録音
松下 潔（まつした きよし）	65	映画美術背景
渡辺 生（わたなべ しょう）	93	映画照明

（敬称略・氏名50音順）

【映画功労受賞者功績】

井上 治

大映京都撮影所編集部を経て、昭和30年日活撮影所へ入社。「砂の上の植物群」（中平康 昭39）で編集技師になる。以降、日活を中心に活躍。主な作品に「風車のある街」（森永健次郎 同41）「妹」（藤田敏八 同49）「帰らざる日々」（藤田敏八 同53）「翔んだカップル」（相米慎二 同55）「暗室」（浦山桐郎 同58）「海と毒薬」（熊井啓 同61）「千利休 本覚坊遺文」（熊井啓 平成1）「橋のない川」（東陽一 同4）「遠き落日」（神山征二郎 同4）「深い河」（熊井啓 同7）などの、話題作、秀作がある。また、平成元年からは日本映画学校で講師を務め、多くの後進を育成した。同12年から22年5月まで日本映画・テレビ編集協会理事長を務めた。

笹川 ひろし

手塚治虫の最初の専属アシスタントを経て、昭和33年マンガ家としてデビュー。虫プロのテレビ・アニメ「鉄腕アトム」に関わり、アニメーションに魅せられ、同39年、竜の子プロダクションに入社する。以降ディレクターとして、数々のテレビ・アニメを製作した。代表作に「ヤッターマン」などの「タイムボカンシリーズ」がある。主な作品に「宇宙エース」（昭40）「マッハGoGoGo」（同42）「ハクション大魔王」（同44）「新人造人間 キャシャーン」（同49）「オタスケマン」（同56）「忍者ハットリくん ニンニン忍法絵日記の巻」（同57）「オバケのQ太郎 とびだせ！バケバケ大作戦」（同61）「劇場版ヤッターマン 新ヤッターメカ大集合！」（平21）など。

杉井 ギサブロー

昭和32年、東映動画入社。長編アニメーション映画「白蛇伝」(昭32)にアニメーターとして参加。同36年、手塚治虫の虫プロダクションに入社。「ある街角の物語」やテレビアニメ「鉄腕アトム」(同39)で作画、演出を担当する。虫プロ作品「悟空の大冒険」ではチーフディレクターを務めた。同43年から同51年までグループ・タックに参加、後にフリーとなり数多くの劇場用、テレビ作品を制作する。平成18年からは京都精華大学教授となり、後進の育成にあっている。主な作品に「ジャックと豆の木」(昭49)「銀河鉄道の夜」(同60)「タッチ 背番号のないエース」(同61)「紫式部 源氏物語」(同62)「ストリートファイターII MOVIE」(平6)「あらしのよるに」(平17)など。

築地 米三郎

昭和14年に新興キネマに入社し、師匠である技師長の青島順一郎・兄弟子の岡崎宏三の撮影助手となる。戦後は大映特撮(特殊撮影)分野において卓越したアイデアと旺盛な実行力で貢献する。中でも大映の看板となった大ヒット作「大怪獣ガメラ」(昭和40)を世に送り出した功績は大きい。同41年大映退社後は(株)築地企画特撮プロを設立し、特撮の研究に傾注し、映画・テレビ番組に特撮技法を導入。「コメットさん」(TBS全国放送42～43・79話)は初のギャラクシー賞を獲得。また、地域広報映画・ビデオ作品等、100本以上の作品をプロデュースしている。現在も3Dの新作に取り組み活躍している。主な特撮監督作品に「宇宙人東京に現る」(島耕二 同31)「氷壁」(増村保造 同33)「日蓮と蒙古大襲来」(渡辺邦男 同33)「細雪」(島耕二 同34)「秦・始皇帝」(田中重雄 同38)「風速75米」(田中重雄 同38)「大怪獣ガメラ」(湯浅憲明 同40)など。

橋本 泰夫

昭和42年、太田六敏が率いる録音グループ「權の会」の設立に参加。助手及び技師として多くの撮影現場で経験を積む。同55年フリーとなり、映画・CM等の録音技師として活躍。「植村直己物語」(佐藤純彌 同61)で日本アカデミー賞最優秀録音賞を受賞、以降「敦煌」(佐藤純彌 同63)「おろしや国酔夢」(佐藤純彌 平3)などの大作で録音技術を示す一方、「病院で死ぬということ」(市川準 平5)「大阪物語」(市川準 同10)で毎日映画コンクール録音賞を受賞するなど、幅広く活躍している。(協)日本映画・テレビ録音協会専務理事。他の作品に「あ・うん」(降旗康男 平1)「風の又三郎 ガラスのマント」(伊藤俊也 平1)「アフター・スクール」(内田けんじ 同20)「桜田門外ノ変」(佐藤純彌 同22)。

松下 潔

国際劇場背景部を経て、昭和40年東映東京撮影所背景部に助手として入社。同50年技師に昇進し、セット撮影を中心に量産される同撮影所作品、その美術を支える背景に腕をふるった。平成15年(有)松下美術背景を設立し、塗装、エイジング、背景と連なるセットの構築に一貫した技術力を提供している。近年の主な担当作品に「鉄道員」(降旗康男 平11)「半落ち」(佐々部清 同15)「北の零年」(行定勲 同16年)「明日の記憶」(堤幸成 同17年)「剣岳」(木村大作 同20年)。

渡辺 生

昭和13年照明助手として東京発声映画製作所(後東宝)に入社。「奥村五百子」(豊田四郎 昭15)などの照明に従事。後に応召し、復員後は東映東京撮影所照明課に入社、同33年新たに製作を開始した教育映画配給社東京スタジオに転じた。主に教育映画、記録映画で活躍する。「黒い太陽」(昭32)「有峰に集う」(同33)「大いなる立山トンネル」(同35)「大隈重信」(同40)、「ゴンドラ」(伊藤智生 同61)など。自身の体験を自主映画として製作した「おてんとうさまがほしい」(平6)は、認知症の記録映像として知られる。昭和55年増谷賞受賞。

<参考>

平成22年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

勝 田 友 巳	毎日新聞記者
清 水 浩 之	ゆふいん文化・記録映画祭コーディネーター
谷 川 建 司	早稲田大学政治経済学術院客員教授・映画ジャーナリスト
中 嶋 清 美	社団法人映像文化製作者連盟事務局長
福 井 康 雄	短編映像プロデューサー
吉 原 順 平	映像・展示プランナー

【映画功労部門】

華 頂 尚 隆	社団法人 日本映画製作者連盟事務局長
黒 井 和 男	株式会社黒井オフィス 代表取締役
出 川 三 男	美術監督、協同組合 日本映画・テレビ美術監督協会 理事長
前 田 米 造	撮影監督
山 口 康 男	アニメーション評論家

(敬称略・氏名 50 音順)

(問合せ先：文化庁 TEL 03-6734-2083)